

オリッサの山岳民族

インド東部に位置するオディシャ州（旧オリッサ州）。

州の山岳部には62の部族があり、時代の流れを無視するかのようにも独自の生活様式を守りながら暮らしています。

コンド族に会いに定期市へ

オリッサの部族の中で最大の指定部族であるコンド族。彼らの村への立ち入りは禁止されているため、出会うには週に一度行われる定期市に行く必要があります。一口にコンド族といっても複数の部族に分かれています。谷に暮らすデジャ・コンド族や、丘に暮らすドングリア・コンド族などがあり、それぞれの村で暮らしています。コンド族の言葉はドラビダ語に分類され、肌は黒く、中・南太平洋の島々からやってきたのではないかとわれています。

ドングリア・コンド族の集まることで有名なチャティコナという町の水曜市。彼らは市場から約20km離れたニオモギリという丘からやってきます。週に一度の市の日は、朝3時頃に家を出て森で採れるフルーツ、草などを売りにきます。あまり商売上手ではないドングリア・コンド族は、まず市場

の手前でデジャ・コンド族に売ります。同じ民族なので彼らの言う値段を信じています。商売上手なデジャ・コンド族は、それを市場でもう少し高めに販売するのだそうです。

コンド族は、女性が重要といわれています。子供や男性の面倒を見るのも女性、市場でも女性が主役。ドングリア・コンド族の特徴は、女性が白い布を巻き、髪の毛にたくさんのヘアピン、そして小さなナイフをさし、鼻に3つの輪をつけていることです。初めて市場に行ったとき、どうしても髪に飾っている小さなナイフが欲しくて、一つ100ルピーで譲ってもらいました。

コンド族の各村には、独身の男女が集う集会所があり、男性は違う村からやってきます。そこで村人が伝統やルールなどを教えていきます。女性は生涯のパートナーになると思う男性に、お手製の刺繍を渡し、受け入れられると結婚となります。

ボンダ族が来るアンカデリの木曜市

ボンダ族がやってくるのは、定期市の中でも最もインパクトがあるアンカデリの木曜市。ボンダ族の他にウラル・ガダバ族、ボロ・ガダバ族、マリ族、デイダイ族、ロナ、ビカ（ロナとビカは民族というよりもカーストの名前）という7つの民族が主に集まります。ボンダという名前は、ミャンマーから来たという説もあります。ビルマ→ボルマ→ボン。この説については地元の人と話なので、記録もなく定かではありません。

ボンダ族の女性は伝統的に髪を刈り上げ、ビーズ細工を頭に巻いています。胸には子安貝やビーズのネックレスを幾重にも重ね、その下には何も身に着けていません。下半身は20cm幅ぐらいの布（指輪のように小さな布なのでリンガと呼ぶ）を巻き、紐でとめています。ボンダ族の男性は、シャツにズボンといった一般的な洋服ですが、元々狩猟を産業としていたため非常に好戦的です。断りなくカメラを向けると槍で威嚇されることもあります。

週に一度の市の日。ボンダ族は約35kmも離れたボンダ・ヒルから早朝に家を出発し、9時半ごろ到着します。まだ冷える早朝、丘から降りてくる彼らの羽織っている真っ青なマントが、乾いた山岳地帯にとっても映

- ❶ 市場に向かうドングリア・コンド族の女性
- ❷ 女性の大きなイヤリングと太い金属製のネックレスが特徴的なウラル・ガダバ族
- ❸ ドングリア・コンド族の女性が身につけるナイフの髪飾り
- ❹ シアリという葉を頭上にのせて市場へ売りに向かうボンダ族の女性
- ❺ 青いマントを羽織るボンダ族
- ❻ チャティコナの水曜市
- ❼ ビーズ細工が特徴的なボンダ族

COLUMN ダウリーとコンド族の話

ヒンドゥー教の習慣で今でも残っているダウリー（結婚持参金）。花嫁の家族から花婿とその家族に対してされる支払いのことで、経済的な負担の大きさから社会問題となっています。コンド族にダウリーはありませんが、逆に花婿の両親が、村のシャーマンが決めた贈り物（水牛数頭など）を花嫁側に贈ります。もし準備できない場合は、花婿が花嫁の父親の下で労働力として働き、その後に結婚が認められるのだそうです。



左/クッティア・コンド族の女性。トラを模した刺青が特徴的
右/チャティコナの水曜市で出会ったドングリア・コンド族

関連ツアーのご紹介



今も息づく貴重な少数民族の文化を求めて
オリッサ民俗紀行 インド東部の山岳地帯をゆく

